CDEJのための情報アップデート

小児糖尿病サマーキャンプに参加して

土浦協同病院看護部　内田みさ子

日本の小児糖尿病サマーキャンプは丸山博先生（現松戸クリニック院長）によって1963年に最初に開かれ，現在ではほとんどの都道府県で開催されています．サマーキャンプの目的は，同じ病気を持つ友達やボランティアの学生，医療スタッフと集団生活をする中で，糖尿病の知識や自己管理を実践的に身につける事が主なことです．

【媒体を使った糖尿病教室】

筆者は平成18年8月23日（水）～25日（金）に開催された第21回茨城つぼみの会サマーキャンプに参加しました．参加患児は28名（スタッフ48名）で低学年と高学年の2グループに分けられ，キャンプ初日には糖尿病教室が企画されました．筆者は低学年のグループに対して媒体を使った糖尿病教室を行いました．

図1は食べ物の流れとインスリンの作用を立体的に示したものです．図2はインスリンを繰り返し同じ部位に打つことでできる硬結を実際に触って疑似体験するもので，硬結がないお腹とあるお腹を両面合わせたものです．いずれも昨年開催された第11回日本糖尿病教育・看護学会学術集会でも紹介したもので，図1の各臓器はマジックテープで取り外しができるようになっています．

図1 「名称：お腹の探検帯」

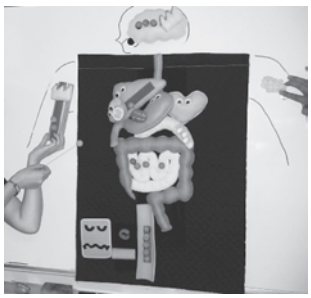


図2 「名称：どっちがいいかな？」（左：硬結なし，右：硬結あり）



図1では「おなかの中を探検してみましょう」となげかけ，全て取り外した臓器の名前を説明し，食べた物が口からどこへ運ばれるのか，また，各臓器が身体のどこにあるのか考えてもらいながら，臓器をひとつずつ取り付けていきました．脳の場所は簡単に答えが返ってきて，胃，心臓，腸はヒントをもとに答えられましたが，肝臓と膵臓の位置は答えが得られませんでした．筆者がわざと間違った位置に取り付けておどけて見せると歓声が起こり，楽しい雰囲気で媒体を通したお腹の中の探検ができました．また，各臓器の働きとインスリンがどのように活躍しているのかも同時に伝えると，自分の手を身体に当て，うなずく患児もいました．時間の都合上，図1だけの説明になりましたが，低学年で硬結ができている子もいた事をキャンプ終了後に主催者から伺い，図2を用いて説明ができなかったことが悔やまれました．

小児糖尿病患者支援において媒体は，基礎的な知識はもちろんのこと，見て，触れて，考え，「なぜ？」と疑問を引き出したり，病気や身体に対する想像力を向上させたり，子どもの感性を育てることに大いに役立つと考えます．特に幼児期や低学年の子どもたちには遊びを通して学べる工夫をしたいものです．

サマーキャンプは，子供たちが成長し，将来，困難にぶつかった時に乗り越える力をつくる基盤となると考えます．小児糖尿病の子供たちが病気に負けることなく成長し，のびのびと人生を楽しんでくれる事を切に願います．